世代間コミュニケーションを生み出すための研究

–「お盆」のインスタレーションの提案–

Research on Intergenerational Communication

- “Obon” Installation Proposal -

■ 蒋　旭強　Xuqiang　JIANG

愛知県立芸術大学大学院　森真弓研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：世代間コミュニケーション、インスタレーション、行事

はじめに

経済や文化が急速に発展した現代では、核家族が形成されるようになった。多くの人は、自分らしいライフスタイルや未来を追い求めている。かつて人々に影響を与え、教育してきた多くの絆や親族の絆が、次第に希薄になってきている。 それぞれのライフスタイルや交友関係で、世代間のコミュニケーションは次第に忘れ去られていく。その特殊な日や祭りの日のみは、家族と長いこと連絡を取っていないことを思い出させる。

現代日本のような社会は低欲望傾向にあり、結婚し子孫を残すことを考えない人が増えている。若者は責任を負担したがらず、シンプルな生き方を追求している。一方で、社会問題の最重要課題では人口問題であるというアンケートの結果がある［図１］。現在、岸田政権は「異次元の少子化対策」を打ち出しているほどである。

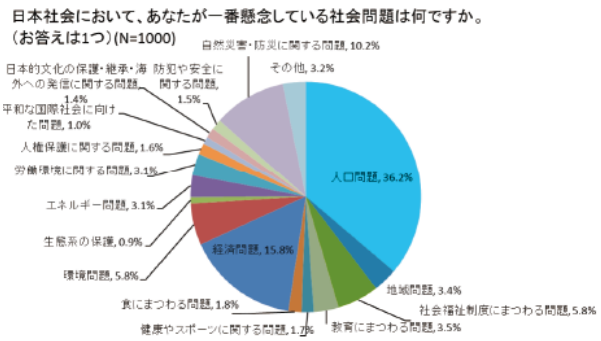


図１　2022 年日本社会一番懸念している社会問題

ここには、理想と現実のズレがあることが見て取れる。こんなギャップや不合理さ危機的状況である今、本研究では、長い歴史の中で大切にされてきた年中行事に注目し、再解釈していく。大切な文化とその意味を伝えていくための仕掛けを提案する。

1.　世代間コミュニケーション

1.1. 統計からの分析

世代間コミュニケーションとは、「異世代の人とのかかわりの中で、子ども達が自主的に何かを感じ、学び、自分自身に活かそうとする態度を芽生えさせることができるような交流」のことである「注1」。つまり、子どもとその交流者との双方に価値のある交流である。

世代間コミュニケーションを通じて、当事者に帰属意識を与え、将来の生活への意識を高めることができる。 また、将来に向けて、問題解決のためのより多くのアドバイスをもらうことも可能だ。

家族は、社会の中で最も小さな単位の集団である。近年における日本では核家族化が進んでいるが、次世代を生み育てる場としての家庭は複数の世代から構成される集団が理想であり、人はその中で、生活の方法だけでなく、人間関係やコミュニケーションの方法等を学んでいく最初の場であると言える［注２］。

また、2022年8月、日本の10、20代の若者を対象として、オンラインでアンケート調査を行ったところ、90%人が「コミュニケーションは大切だ」と回答している［図２］。

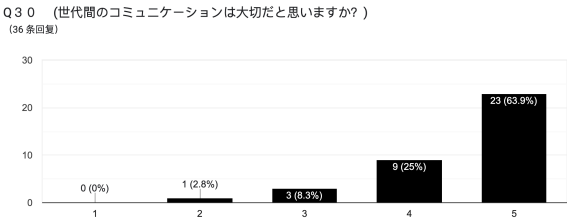


図２　2022 年世代間コミュニケーションの意識

しかし、近年における、さらなる核家族化や共働き家族の増加、家族の生活時間帯のすれ違いなどにより、世代間コミ

時間やお金、生活のさまざまな事情から、家族とコミュニケーションをとる機会が非常に少ないのが現状である。「注3」その場合、オンラインでコミュニケーション形が多くなっていることも判明した［図 3］。

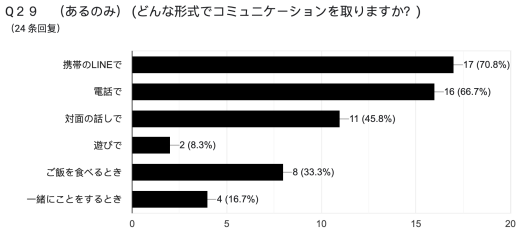


図 3　2022 年世代間コミュニケーションの形式

1.2. 考察

このような変化により、現代の子どもたちは身近に世代間でのかかわりを持つことが難しくなった。祖父母世代の人と日常的にかかわっている子どもは少なくなり、かつてのようにそのかかわりの中から学び、知識を得るという機会も減っている。

さらに、家庭以外の地域や社会においても世代間での交流機会は減ってきている。地域においての人間関係が以前に比べて希薄になり、子どもたちが地域の人たちとかかわるという機会もあまり得られなくなった。家の内でも外でも、子どもたちの周りの人間関係はとても狭く限られたものになってしまっているのである。

2.　年中行事のお盆について

2.1. 年中行事の必要性

我々の社会では、毎年一定の時季に家庭や集団で年々繰返される周期的な行事として、年中行事というものがある。現代では、社会生活の変化とともに形骸化し、行事の意味を伝える機能が弱まりつつある。近年では、行事の内容や意味に関心を持たず、単なる「休日」としか捉えられていない。それによって受け継がれてきた精神文化は、社会の変化とともに、次第に忘れ去られつつある。

世代間のコミュニケーションが薄れている。世代間のコミュニケーションはもはや必要ないどころか、無視できるものになっている。大切な人が亡くなって初めて、なぜ自分がうまくコミュニケーションを発しなかったのか思い出すことができる。盆は過去や大切な人を思い出す時期であることから、軽んじている世代間のコミュニケーションを呼び起こす方法として、お盆を注目した。

2.2. お盆について

1400 年以上前に始まったお盆の仏教風習は、当初は貴族や僧侶だけが参加できる行事だったものである。江戸時代に入ると民衆の間に広く普及し、現代のような形になって受け継がれているとのことである。

1400 年お盆というのは、その典型的な例ということになる。「お盆」はご先祖様が死後の世界から帰ってくるとされている期間のことである。「図4」のように、仏教は日本的に民俗化して変容し、「仏」は死者や先祖祭祀という祖霊信仰と結びついてホトケになった。一方、日本人のホトケという祖霊信仰の民俗は仏教化して「仏」になった。そして「お盆」の行事は、先祖の霊を祀りそこに一族が集まり、自らの命を授けてくれた先祖代々に思いを馳せ、血族の繋がりを認識し合うものとして重要なものである。

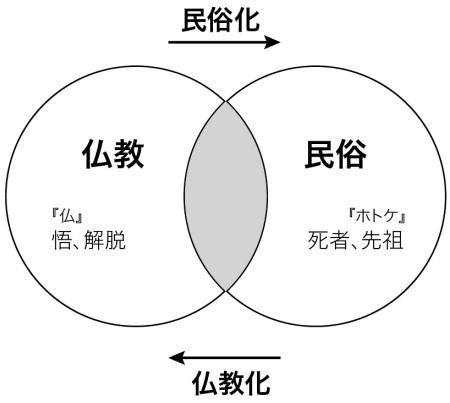


図4　お盆の定位

2.2. お盆の現状

お盆の行事に対して、インタネットのアンケートとSNS で評価を調査した。お盆の行事をするか否かの比率を見ると、宗教の種類に関わらず自身の宗教を認識している人は70%がお盆の行事を行い、宗教が不明･わからないという人の約90%は、お盆行事を行わない結果となった「注 3」。また、無宗教と回答した人では45%が先祖の供養は行っていると答えた。お盆の代表的な行事として81.9%の人がお墓参りと認識しているにもかかわらず、実際に行っている人は 39%しかいない。「受け継ぐ必要がない」と思う人が多い理由は、「面倒」、「伝統な形式が好きない」という答えた人が多い。

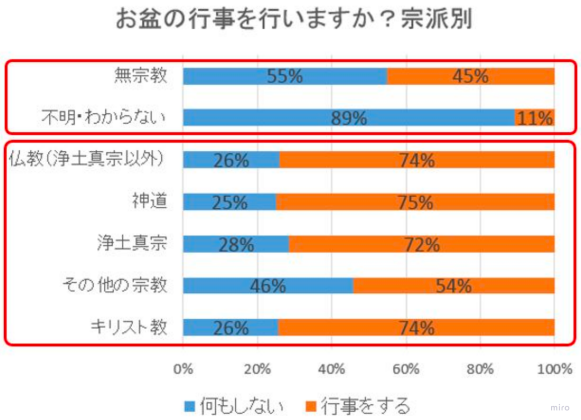


図 5　お盆の行事のアンケート

3.　お盆の作品化

これらのことから、お盆に対する人間の既存の認識や意見を理解した上で、世代間コミュニケーションに対する若者の行動と意識のズレを解決できるのではないか、という仮説を立てた。

「お盆」には色々な行事があるので、それぞれの特徴を生かしたインスタレーションを企画する。インスタレーションは若者に好まれ、思考を起こしやすく、印象に残りやすい。若者

に家族間の絆に対して深く考えさせ、体感的に受け入れられることを狙う。

3.1. 作品「精霊と一緒に踊りましょう」

上記の調査による、盆踊りに参加したのは小学生の頃で、それ以降はあまりないというのが一般的になっている。問題は、そのような形式に人々が興味を感じないことである。同時に、幼い頃にしか参加しないのに、親や学校がその意味を教えず、きちんと理解していないと考えられる。

この作品は、目に見えない精霊の足跡と一緒に踊ることで、先人を迎え入れるという意味を感じられる作品である。全体カメラは作品全体から色を抽出し、背景の画像を作成する。 盆踊りの音に応じて、映像効果が追加される。天井カメラは参加する鑑賞者の動きをとらえ、その鑑賞者を追う足跡を投影する。 さらに、kinect が捉えた鑑賞者の動きと映像中の盆踊りが同期した時、映像の彩度はより鮮やかになる。盆踊りの楽しいビートに乗って踊ることで、先祖と交わり幸せを感じられるという作品とする。

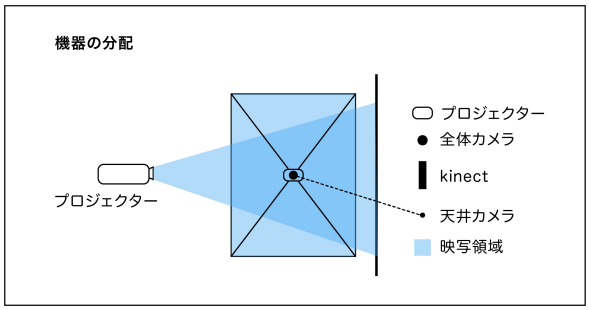


図 6　作品「精霊と一緒に踊りましょう」

3.2. 作品「天国への祈り」

灯籠流しとはその灯籠に火を灯し、河川や海に流す習俗のことをいう。 お盆の時期に行われ、精霊（ご先祖様の魂）が灯籠に乗って川を下り、海のかなたのあの世へ帰ってゆくという信仰に基づいていると言われている。 その為、灯籠に灯す燈明には闇や迷いを照らす智慧の光という意味があるといわれている。

都心に住んでいる人は、行きたいと思っていても、時間の都合で行けないという場合も多いのではないだろうか。また、多くの灯籠は美しいが、リサイクルされなければゴミとなり、環境への負担が増える。リサイクルするならば、時間と責任をもって余分な人を配置する必要がある。

この作品は、水辺で行われる灯籠流しの、美しく静かな祈りの時間を一人でも体験できる作品である。観覧者は自分で思い思いの祈りの言葉や絵を灯籠に記し、水に流す。天井カメラは灯籠の動きをとらえ、その灯籠を追う花火を床に投影する。灯籠が壁の裏まで進むと、Arduino は灯籠がカメラ領域に入ったかどうかを超音波で検出し、同時にカメラで画像認識を開始する。スキャニングされた画像は、正面に投影されている映像の中で重なり合い新たなイメージとして流れていく。

細長い川にゆっくりと灯篭が流れていくのを眺めながら、楽しい時間と祭りを思い出が浮かんでくることであろう。やがて、鑑賞者の願いがプロジェクターに映し出され、遠い空へとゆっくりと流れていきます。一人で祈りと祝福は、神々や想いを寄せる相手にも届くという作品とする。

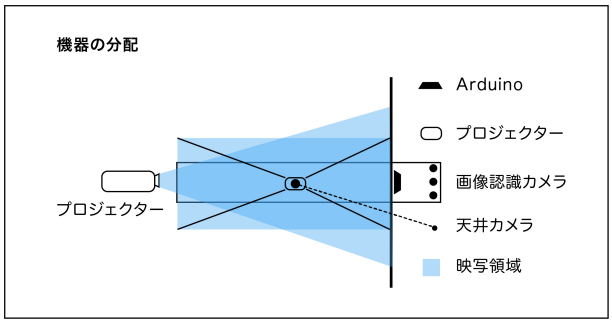


図 7　灯籠流しを再解釈し作品化

3.3. 作品「地元に帰ろ」

お盆や年末年始などの休暇を利用し、一時的に故郷へ帰ることを指している。 お盆休みは、時間や仕事の関係で家に帰らないという選択をする人がいる一方で、長期休暇が取れるため、旅行などの娯楽を選んで過ごす人も多い。しかし、コロナ禍の影響で多くの動作が制限され、帰省が非常に困難になっている。

この作品は、不安と困難な吊り橋のとうい形の段階をくぐって、帰省の意味を再認識してもらうという作品である。 階段にようなの装置、下は無限に広がる空間。この階段の各パーツには、母親の胎内にいる生命の誕生から人生の終わりまで、人生の異なる姿が投影されている。この階段は人が登ることができるが、固定されておらず不安定である。鑑賞者はこの階段を登るが、一段上るごとに赤外線で位置を感知することで映像と音が変化する。歩いて終わった後で扉を開けると、見慣れた背中が待っているという作品である。

みんなは帰りたいと思っていてもそれが叶わず、今でこそオンラインで会話できるものの、帰省は実現しない。いずれ親族とゆっくり会えるだろうと考えていても、いつまで経っても時間の余裕が生まれない。そうしているうちに、目上の人はどんどんこの世から去ってしまう。またいつか相談しようと思っても、もう返事が返ってこない。歳を重ねるうちに、親の声が聞こえなくなるかもしれない。この作品に触れることで、長い間会っていない大切な人や親族に早く会いたい、会わなくてはいけない、という切迫感と期待感が強くなって欲しい。この作品は、人生のさまざまな場面で助けてくれた故郷の人たちを忘れてはならないという作品である。

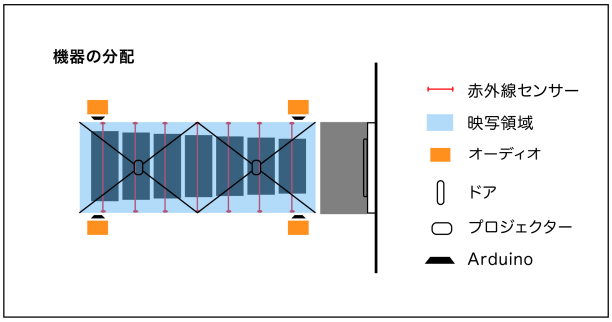


図 8　作品「地元に帰ろ」

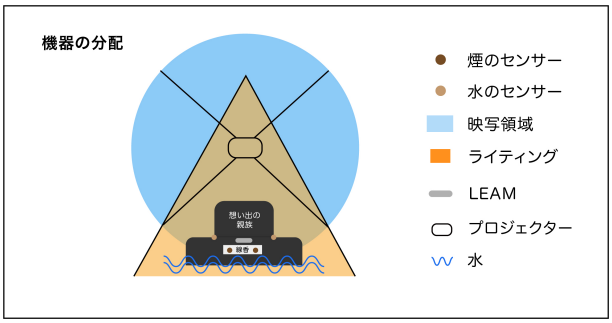
3.4. 作品「知らない先祖を供養しましょう」

お墓は、親しかった故人や先祖の供養を行うための場所である。また、故人との心の繋がりを感じ、心の拠り所としての意味も持っている。お墓参りには、故人を偲んで冥福を祈り、感謝の気持ちを伝えるという意味がある。毎年お盆には墓参りをする習慣があり、亡くなった親族があの世でも元気に暮らせるようにと願うのである。現世では、自分の幸せを中心に考えている人が多いため、多くは死後に餓鬼道と地獄道に入ると言われている。死んでしまった人は、もう自分の進むべき道を変えることはできない。しかし、現世の人の祈りに頼ることで、死んだ人が受ける苦しみを最小限にすることは可能である。そのため、亡くなった親族を供養すると、三悪道（地獄道、餓鬼道、畜生道）から逃げることができると言われている。

しかし、古くから受け継がれてきたお墓参りの習慣は、現代においては随分とないがしろにされている。本来の意味は忘れられ、それを伝える年長者と若者のつながりも減り、お墓に足を運ぶことはただ面倒だと感じ、お墓参りをする人は年々減っている。家族と一緒に行く時も、形式だけを重視して意味を無視する場合が多い。

この作品は、お墓参りの所作をなぞって、その意味を視覚化することによって、お墓参りの受け継ぐ意味を深く考え直すきっかけになってもらうという作品である。仏教においては、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道という「六道」という世界の順序によって、順番が変わる。暗い空間の中で、墓地が黄色い光で照らされている。ここには「先祖」のいるあの世の様子が示されている。幕の向こうには、地獄のような丸い映像が投影されている。誰かが部屋に入ると、地獄のような恐ろしい音が発動する。線香に火をつけ煙センサーに検知されるとその音が小さくなり、故人が「餓鬼道」に転生したことがわかる。お墓に水をかけると、水センサーが反応し、映像がゆっくりと変化する。畜生道から修羅道、人間道へとイメージが移り変わり、ゆっくりと悪霊の道から解放してくれる。最後に、手を合わせて故人の平穏を祈ると、LEAM がその形を感知して天道のイメージが再生される。

全体的に惨めなおどろおどろしい雰囲気が漂っているが、お墓参りの所作を行い祈ることで、あの世の状態が好転し、先祖が救われることを理解させることができる。良い香りのお線香をお墓に供えることで「ここに眠る故人は良い方ですので極楽浄土へお導きください」と願いを込める意味があり、墓石を洗うのは魂を清めるという意味もある。先祖を供養することを次の世代に引き継ぐことで、死んだ後にも自分が供養されて救われるかもしれない、という気持ちにさせる。これによって、先祖を忘れずに過ごすことの大切さを伝える作品とする。



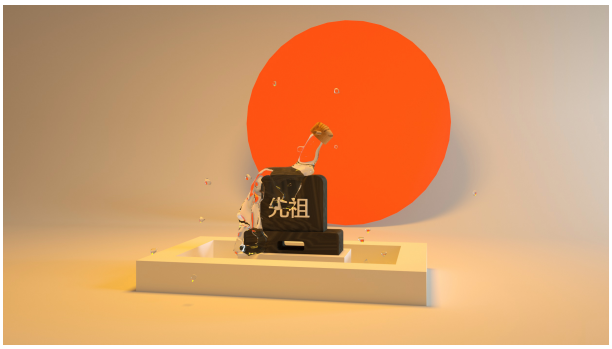


図 9　作品「知らない先祖を供養しましょう」

3.5. 作品「三途の川を渡っての彼岸」

三途の川という概念は、仏教が広く伝わった東洋や日本だけに存在する考え方ではない。例えば、オリエント時代の神話宗教や古代ギリシャ神話でも、現生と死後の世界は川で隔てられているという考え方があった。この世とあの世が、川という境界線で分けられているという概念は、世界的に広く存

在する。

彼岸の親族はどのように暮らしているだろう?三途の川に対するみんなの認識は、単なる思いつきで、 それがどんなものかを考えることはない。大切な人が 亡くなったときと同じように、あの世でどのように暮らしていたかは、あまり考えられていない。

この作品は、此岸と彼岸の境にあると言われる三途の川を渡り、此岸の人たちの祈りによって彼岸の人たちに温もりを送るという作品である。三途の川の前に立つと、彼岸から泣き声や雷や言い争いなどの悪い音が聞こえて来る。鑑賞者(此岸)はプロジェクターで投影されている三途の川に入る。Kinect はその鑑賞者の動きを捉えて、川の中を歩くような音と波の映像を投影する。また、川の手前にあるテーブルの上で祈ると、leap が手の動きを認識してオルゴールが優しい音楽を鳴らす。彼岸の人たちへ、笑い声や慰めの声、風の音など楽しく明るい音を送る。

鑑賞者は遠くから眺めるだけで、あの世の故人を助けたり触れたりすることはできない。 しかし、ちょっとしたことをすることで、亡者の世界に大きな温もりを送ることができる。自分自身を少し与えることで、他人の最大の幸福を実現できる作品とする。

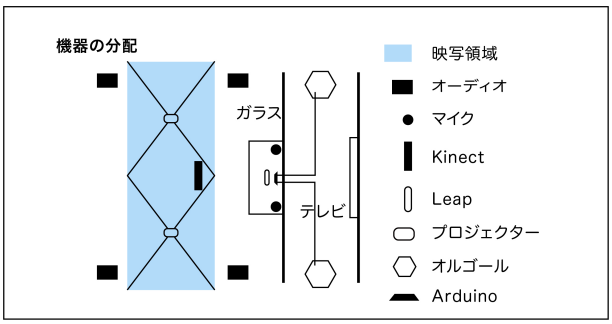


図 10 作品「三途の川を渡っての彼岸」

4. 検証方法とそれによる効果

お盆までこれを繰り返し、インスタレーションの精度を高め、成果としてまとめる予定である。2023年のお盆には、作品の検討と体験のためのワークショップを開催する予定である。研究対象からフィードバックを集め、最終的な卒業制作を決定する。

本研究のインスタレーションによって若者のお盆への意識がポジティブに変わる。若者自身が、継承すべき年中行事の復興と再興を働きかけるきっかけともなることで、世代間のコミュニケーションが生まれると考える。

インスタレーションを通じて、インスタレーションの持つ独自性をもっと引き出したい。 コミュニケーションを実現するための手段をさらに発見する。

注、引用

1) 正岡さち・飯塚智子、「世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究」、島根大学教育学部紀要第 42 巻別冊、2009 年、47～53p

2) 日本正月協会、「年中行事とは？年中行事の大切さと年中行事一覧」、<https://www.oshogatsu.org/nenchugyoji/#toc12>(2022/6/24 記事)

他参考文献

・ 正岡さち・飯塚智子、「世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究」、島根大学教育学部紀要第 42 巻別冊、2009 年、47～53p
・ 大友秀明、「社会科教育における「文化学習」の意義と可能性」、埼玉大学教育学部社会科教育講座
・ 邢永鳳、「お盆と日本人の祖先の信仰」、<DOI:10.13370/j.cnki.fs.2010.02.021>、2010 年
・ 高洪興、「中国鬼節与陰陽五行: 从清明節和中元節説起」、複旦学報 (社会科学版)、2005 年
・ お盆研究会 (著)、『お盆本』、株式会社 法藏館、2020 年、16~46p
・ 蒲池 勢至 (著)、『お盆のはなし』、2012 年、12~32p
・ 竹中 敬明(著)、『四季の年中行事と習わし』、2010 年